六十五）を兵庫の自宅マンションの居間で亡くした。

「死後十日経過すると、異臭から発覚した。定年後は悠々自適に暮らしていると思っていたのに、惨状はショックだった」

ゴミが山積し、物が散乱した室内は、几帳面な性格の父親からは想像もできなかったことだ。

「他界する二年前に母と離婚し、父は一人暮らしに。たまに連絡しても『問題ない』と言っていた」（同前）

しかし、実態はテレビ鑑賞と読書で家に閉じ籠りきりの生活で、食事はもっぱらレンジ食品を利用。自炊した形跡はなく、洗濯すら滞っている状態だった。

「預金や年金も十分にあるし、『何か言って来ない限り、構わないのも親孝行』の認識でいた。認知症などから対処するつもりでいたが、まだずっと先だと考えていた」（同前）

郵便物や電話料金明細書から、至近一年ではほぼ誰とも交流がなかったのを知り、

「もっと頻繁に連絡を取るべきだったかもと思うが、気難しくかんしゃく持ちの親父が苦手だったのも事実。とはいえ、家事代行サービスを手配するなど出来ることはあったと思うと心残りだが、仕方ない」

伴侶との別れが〝分岐点〟に

同じように、都心の高層マンションで父親（享年六十六）を亡くした、茨城在住の三十九歳女性が五年前を振り返る。

「同窓会に現れず、何度電話しても通じないを不審に思った同級生が、三日続けて訪ねてくれたのです」

しかし、発見までには労を要した。入口には二重のセキュリティ・ロックがあり、自宅ドアは特殊仕様のオートロック三重鍵で完全な密室状態。分譲マンションのため管理会社にも合鍵がなく、結局、消防車が十五メートルの梯子を伸ばして、二階のベランダのガラスを割って入室し、ようやく遺体が確認された。愛妻と死別して一年が過ぎ、生活を一新するために転居した矢先のことだった。

「一週間も裸のまま浴室で倒れていたのが不憫でした。甲斐甲斐しい母がいなくなって廃付きの持ち家は荒れるばかりで、処分してマンションを購入するのを私が勧めた。防犯と利便性を第一に選んだのがこんな形で仇となるなんて……」（同前）

「死後一週間以上発見されない亡骸は決して珍しくない。また、天涯孤独、貧しい暮だけが孤独死を迎える」との認識も現実からは遠い。先述の二件のように、二階のベランダの鍵が突然に見舞われる日常なのだ。

一万件近くの死後の整理に携わって来た、遺品整理専門会社「キーパーズ」代表の吉田太一氏が指摘する。

「多くの中高年男性にとって、離婚や死別による伴侶との別れは、文字通り生命線を絶たれるのと同じ。中でも今の六十～七十代は高度経済成長期にがむしゃらに働いて来た世代で、プライベートに費した時間が乏しい。家事や子育ては妻任せで、子供との繋がりも薄く、仕事以外での社会性が培われていない場合が少なくないのです」

取材を進める中で、「予備軍」を意感させる男性にも出会った。一昨年から埼玉のアパートで一人暮らしを始めた六十四歳男性は、「この部屋でいつ死んでもおかしくないよ」と、半ば自嘲気味に苦笑する。

散らかった室内にはお茶と缶酎の二リットルペットボトルが点在し、ゴミ袋にはスーパーの見切り品惣菜の食べ残しとコンビニ弁当が集っている。一流に溜まった腐水からは饐えた臭いが漂い、ハエが洗面台に携わって来た、遺品整理専門会社「キーパーズ」代表様子がなく、受話器に塵が積もっている。まさに、『冒頭で示した「現場」と「お迎え」の様相だが、「お迎え」が来るのはおそ遅様任せ」と本人はどこか冷めた風だ。

二十七歳で見合い結婚、一男一女をもうけたが、六十二歳の退職を機に離婚。「昔は結婚するのが当り前だったから、さして好きでもない女と一緒になって子供もつくった。だけど、結婚が不向きな男だっている。もともと付き合いは苦手で、女房や子供にも軌着や関心は薄かった」（同前）

元妻は「どこでどうしているか知らない」し、子供達とも音信不通のままだ。四人の兄妹とは、八年前に父親の葬式で顔を合わせたきりで、転居通知も「面倒」と出さず仕舞いでいる。現金生活は「贅沢しなければ不自由しない。大きな楽しみもない」日々で、近所に顔見知りも山来たが、「話し込むほど話題も興味もない」とそっけなく呟く。

地縁、社縁、血縁が全て絶たれた状態は、

長く使われていない電話機が

中流サラリーマンも〝予備軍〟に？（本文とは関係ありません）

「孤独だけど、気楽。寂しさはある時期のピークを過ぎると何も感じなくなる。『いずれこのまま死ぬのかなぁ』と思ったりするが、死んだ後のことなんて考えない。生きている間に迷惑掛けていない分、死んだ後に少しくらい面倒起こしてバチは当たらないんじゃないの」

と視線を宙に浮かせた。

孤独死と十年来向き合って来た常盤翠団地自治会（千葉）の中沢卓実会長は、「定年後に生き方が分からないまま、自宅に閉じ籠る単身男性はきわめて多い。いかにして家から出させるかが孤独死予防のカギなのです」と声を大にする。

あかふく 伊勢だより

長き尾の鶏集まりて初時雨

竹中碧水史・画

小林茅一

「男のプライド」が邪魔になる

「生活金殺を奥さんに頼りきっていた男性など、失った途端にたないない尽くし」

第二の人生へ、ボランティアや地域活動に挑んでも、積み上げた仕事人間としての慣習やキャリアが、時に弊害として立ちはだかる。

「相応の役職で組織を迎える人が多く、常に上から目線で下の者へ指示する感覚が染み付いている。会社は縦社会だが、近所付き合いや地域活動全くの横社会。しかも主役は女性で、同じ目線に立てず、命令口調や横柄な態度から総スカンを喰らって、『こりごり』と、引き籠る壮年男性は後を絶たない。特にエリートやインテリほど理屈に強い分現実に弱く、フラットな人間同士の関わり方を体得しておらずに、孤立して籠りきりになる確率が非常に高い」（同前）

加えて、日常生活におけるルールや能力を備えて来なかった人も多い。孤独死した現場がゴミの山になりがちなのは、「ゴミ出しのルールが分からないからなんです」と同氏は説く。

「生活金殺を奥さんに頼りきっていた男性など、失った途端にたないない尽くし」に。整理整頓、食事の支度、ゴミ出しの他、地域交流、身内との連絡など、どれもお手上げ状態となる。中でもゴミ出しは一度出し方を間違えて注意されると、恥と体験から家の中へ籠め込む傾向が顕著です」（同前）

無闇にSOSを出せないという、弱音を吐けないという父親や男としてのプライドも八ドルになり得る。

現役時代は一部上場企業の部長職に就いていた、都内の七十二歳男性は「死にかけて初めて、見栄と虚勢を捨てられた」と吐露する。

四年前に妻が急逝した後、生活は一転して荒み、酒を鯨飲する毎日が続いた。

「『これじゃいけない』と分かっていても、立ち直り術がなかった」（同前）

嫁いで北海道に住む二人娘には迷惑を掛けたくない。さりとて近所に頼るべき相手もいない。ウマの合わない弟に弱音は吐きたくない。誰にも助けを求められないまま半年が過ぎた頃、玄関前で倒れていたのを巡回中の警察官に救われた。

「室内にいれば間違いなく孤独死していた。おかしなもので、あれほど死にたがっていたのに、いざ本当に近きかけると、『生きていたい』と切実に願った。目の覚めた思いで、退院後は娘に全てを打ち明け、緊急時のケアが受けられる専用マンションへ引っ越した。独りで死ぬ覚悟はあるが、対応や発見が遅れては誰の得にもならない」

伊勢名物 赤福
伊勢市宇治中之切町・電話(0596)22-2154(代)

昨年より料理教室に通い始め、簡単な料理も出来るようになったと胸を張る。

「妻を亡くして以来、食べるものには当然に苦労したからね。会社で産単位のカキを動かして来ても、目玉焼き一つ作れない自分が情けなかった。『男子厨房に入らず』と威勢を張って、寿命を縮めてしまう場合じゃないと悟った」

生き方を変え、自身で生活環境を整えられれば、遠うに未来も開けて来る。

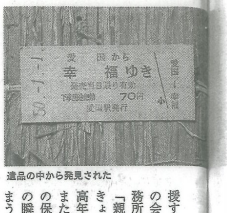
「孤立死は『なりたくない』と思えば、本人の努力次第で確率を減らせるもの」と前出の吉田氏が付言する。

「孤立死となる多くの場合は、生きて行く上でのバランスを欠いた、もしくは放棄した人が大半を占めます。室内にほぼ必ず壊れた電化製品が放置されているのが好例で、『壊れたら修理する』『汚れたら拭く』によって定期的な訪問を受ける。が、自活能力のある壮年男性は周囲からもあまり注意を払われない。

「新聞や牛乳の配達員も、配達物がかなり溜まっていが決まるまでの間は、葬儀社・「神奈川こすもす」の清水宏明代表が指摘する。

「搬送費用や保管料等を含め、引き取る場合は繞骨まで最低でも三十万円は必要です。これに遺品処理や納骨での費用も加わるため、『気持ちはあっても引き取れない、引き取りたくない』遺族も大変多い。親族でも、関係が密でなければ知人以下の扱いとされるのが、偽りのない現実なのです」

更には、親きょうだいとも縁が遠ざかれて〝無縁〟化する実態に幾度となく直面する。



遺品の中から発見された

「遺骨の専門ブランド『ダビアス』を展開する葬儀社・「神奈川こすもす」の清水宏明代表が指摘する。

「搬送費用や保管料等を含め、引き取る場合は繞骨まで最低でも三十万円は必要です。これに遺品処理や納骨での費用も加わるため、『気持ちはあっても引き取れない、引き取りたくない』遺族も大変多い。親族でも、関係が密でなければ知人以下の扱いとされるのが、偽りのない現実なのです」

更には、親きょうだいとも縁が遠ざかれて〝無縁〟化する実態に幾度となく直面する。

また、主の死が分からず、腐り始めた遺体に幾度となく頽すりをして、体の一部を血塗れにして寄り添う飼い猫と一緒に発見された女性や、亡き主人の腕を食べて命を繋いだ愛犬と共に見つけられた現場もいた。

加えて、高齢者の中には、自身の価値観と生き様に殉じた孤独死も実在する。

「国の世話になるなら死んだ方がマシ」と、生活保護を受けずに困窮した生活を続け、柴漬失調から死に至ったケースや、未婚の年配女性が「人前で肌を晒すのは恥」と、検査や手術を拒

畳や床から「死」が抜けない

「本人が望めば『自宅から』一歩も出たくない」が許され、認められる世の中です。「尼介」ことには関わらない」風潮において、孤独死の現場は増加傾向にあるもの。第一発見者は客疑を掛けられ、面倒が付いて回るため、〝死んでいるらしい〟気配あっても『誰かが通報してくれれば』と先送りされ、発見が遅れる事例は多数に上ります」

これには、お年寄りと呼ばれはじめた若者、自活能力がある事実も裏目に出る。電化製品が放置されている場合、民生委員や家主などが注視し、場合によって定期的な訪問を受ける。が、自活能力のある壮年男性は周囲からもあまり注意を払われない。

「新聞や牛乳の配達員も、配達物がかなり溜まっていれば、遺族は「無縁」化する。

「遺骨の中から発見された遺品」の扱い方は、「ダビアス」を展開する葬儀社・「神奈川こすもす」の清水宏明代表が指摘する。

「搬送費用や保管料等を含め、引き取る場合は繞骨まで最低でも三十万円は必要です。これに遺品処理や納骨での費用も加わるため、『気持ちはあっても引き取れない、引き取りたくない』遺族も大変多い。親族でも、関係が密でなければ知人以下の扱いとされるのが、偽りのない現実なのです」

更には、親きょうだいとも縁が遠ざかれて〝無縁〟化する実態に幾度となく直面する。

また、主の死が分からず、腐り始めた遺体に幾度となく頽すりをして、体の一部を血塗れにして寄り添う飼い猫と一緒に発見された女性や、亡き主人の腕を食べて命を繋いだ愛犬と共に見つけられた現場もいた。

加えて、高齢者の中には、自身の価値観と生き様に殉じた孤独死も実在する。

「国の世話になるなら死んだ方がマシ」と、生活保護を受けずに困窮した生活を続け、柴漬失調から死に至ったケースや、未婚の年配女性が「人前で肌を晒すのは恥」と、検査や手術を拒

飼い猫や愛犬が遺されて……

農村地では田畑の中で倒れたまま、数日以上見つけられなかった死もあった。

溶けた肉が脂と変わるまで、二十四時間風呂で延々煮込まれて自骨化した遺体や、和式トイレで力んだ拍子に脳溢血となり、トイレ前で死亡した人もいる。

仰向けに倒れたまま、ミイラ化して発見された亡骸も多い。

また、主の死が分からず、腐り始めた遺体に幾度となく頽すりをして、体の一部を血塗れにして寄り添う飼い猫と一緒に発見された女性や、亡き主人の腕を食べて命を繋いだ愛犬と共に見つけられた現場もいた。

加えて、高齢者の中には、自身の価値観と生き様に殉じた孤独死も実在する。

「国の世話になるなら死んだ方がマシ」と、生活保護を受けずに困窮した生活を続け、柴漬失調から死に至ったケースや、未婚の年配女性が「人前で肌を晒すのは恥」と、検査や手術を拒

意識が追い討ちを掛ける。

二十七年の生活保護に亘り葬祭業に従事する、家族葬専門葬儀社「オフィスシオン」代表の寺尾俊一氏が言う。

「『迷惑掛けたくない』と、見通しにする」ケースが多い。また、故人が離婚した男性の場合では、別れた妻へ連絡を取っても、まず一〇〇パーセント、赤の他人扱いで取り合ってはもらえません」（同前）

自宅で独りで事切れた際、最も問題となるのは「いつ発見されるか」だ。死因や状況、季節により左右されるが、一～二日以内であれば亡骸の傷みも比較的少なく、搬送や検証、後の現場処理の負担も軽くて済む。

無論、時間が経つに連れ遺体は腐敗が進み、猛烈な悪臭を放ちながら凄惨な姿に変じ、それがゴミ屋敷だっては溶けた皮膚や肉が、壁や天井には強烈な臭いが、日を追って臭深く浸透し続け

りー頼みの綱ではない。

前出の清水氏が続ける。

「いくら関係係数が高くても、血縁者が遠方にいたり、関わりのある人が近くにいなければ、相当数に上ります。「予備軍」の可能性があります。孤独死に関しては、周囲にどれだけ「人がいるか」ではなく「縁を繋げているか」が鍵を握る医師が言う。

「突然に襲われる脳溢血や心不全での急死は、絶命までに僅か数十秒の遭手しかなく、名医が側にいても救命はかないません。人の死に関係ありません。人の死の場合では福祉事務所等、市区町村での行政扱いとなるが、いずれの場合も処遇んで病気を通行させ、自室で死を迎えた例もある。

「一人で生きていれば、一人で死ぬのは当然の結末。問題は、発見が報告に遅れたことが、「予備軍」の一人が近くにいなければ、誰もが「予備軍」になり得る。

「孤独死の背景とされる「無縁社会」が語られる際は、決まって家族関係や地域コミュニティの崩壊が問題視されるが、前出の吉田氏は「壊れた」のではなく、時代に沿って〝変化した〟と問題をして続けるる。

「どんな密室の遺品も、大抵は必ず数日でウジが湧きます。口や肛門から入ったウジ虫は中から内臓や筋肉を食い荒らし、遺体を膨らます。

「遺体の腐敗が進んで長く放置されていた場合はあらゆる物に臭いが染み付く。集合住宅では、下階の天井から臭い続ける程です。

壁紙や畳、床を剝がして何度消毒しても早々には臭気が抜けず、場合によっては半年から一年ほど、室内をがらんどうにして外気を通すべ要も生じます」

孤独死が発見されると、まず、通報を受けた警察の現場検証が行われる。遺体の外傷を確認し、直腸温度を推定した後で、亡骸は、警察署へ搬送される。

親族や身元保証人には、この前後で連絡が取られ、医師による検案と、必要に応じて解剖が行われた後は、明らかに事件性のある場合を除き、遺体は遺族の引取りとなる。

引取り拒否や引受人不在の場合では福祉事務所等、市区町村での行政扱いとなるが、いずれの場合も処遇かるるが、貸貸物件では家主が全てを負担せざるを得ない。

前出の中沢氏が言う。

「遺体の腐敗が進んで長く放置されていた場合はあらゆる物に臭いが染み付く。集合住宅では、下階の天井から臭い続ける程です。

壁紙や畳、床を剝がして何度消毒しても早々には臭気が抜けず、場合によっては半年から一年ほど、室内をがらんどうにして外気を通すべ要も生じます」

孤独死が発見されると、まず、通報を受けた警察の現場検証が行われる。遺体の外傷を確認し、直腸温度を推定した後で、亡骸は、警察署へ搬送される。

親族や身元保証人には、この前後で連絡が取られ、医師による検案と、必要に応じて解剖が行われた後は、明らかに事件性のある場合を除き、遺体は遺族の引取りとなる。

引取り拒否や引受人不在の場合では福祉事務所等、市区町村での行政扱いとなるが、いずれの場合も処遇